

『枕草子』と陰陽道

——他の仮名散文と比較しつつ——

中 島 和歌子

要旨 『枕草子』には陰陽道に関する記事が少なく、仏教関係のその多さ、多様さと対照的である。一方『栄花物語』正篇は、『枕草子』と重なる時代・人物を描く部分を含めて、陰陽道に関する記述が多く、禁忌を重視し陰陽師を信頼する様子が描かれている。『枕草子』には、官人の陰陽師は固有名詞が見えないだけでなく、ほとんど描かれていない。その理由としては、視野の問題もあるが、出産を含む定子の危機そのものを一切記していない為に登場の機会がなかった、実際に道隆が兼家や道長・頼通ほどに禁忌を遵守し陰陽師を重用していなかった、といったことが考えられる。但し、記事は少ないものの、陰陽師に従う小童部や法師陰陽師、更には式神まで、陰陽師の周辺にいるものは取り上げられていた。これらは院政期の説話などには散見するが、陰陽道関係の記事が多様である『宇津保物語』を含め、仮名にはあまり見られない。何かの理由で文学作品に取り上げられなかった風俗や言葉が、『枕草子』によって垣間見える一例である。また、『呪詛』の明記も珍しいが、伊周や高階氏による道長方呪詛の史実を考慮すると、記したことに挑発的意味あいが感じられる。物忌・方違については風俗としてそのまま受け入れる様子が見え、口実として利用することもない。しかし、呪詛、凶会日、物忌札や物忌の描き方においては、禁忌意識は薄い。また、これらの記事は連続して出てくることが多い。特定の物忌は、一条天皇四例、村上天皇・伊周・繁子・清少納言各一例で、定子の物忌は無い。伊周や清少納言の物忌は、定子との心の繋がりの確認の契機となっている。『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』と愛情の種類は異なるが、表現方法は同じだと言える。

はじめに

平安時代の文学作品と陰陽道との関係を論じたものは戦前からあるが、特に一つの作品を取り上げる場合は、『源氏物語』（以下『源氏』、書名は適宜略す）や『蜻蛉日記』に限られている。⁽²⁾『枕草子』は、陰陽道に関する事柄があまり記されていないこともあり、部分的に史料として注目されることはあっても、総合的に扱われたことはないと思われる。よって本稿では、それらがどのように描かれているのか、全体を見ていくことで、陰陽道の実態をかいま見ると共に、陰陽道から見た作品の特徴も明らかにしたい。その際、『枕草子』に時代的に近い他の仮名作品（主に和歌や説話以外）での描かれ方との比較も行う。なお『源氏』については、先学の成果に基づき別稿で述べたので、本稿での言及は最小限に留める。ご参照いただければ幸いである。

具体例を見る前に、山下克明氏による陰陽道の定義を引用しておく。⁽⁴⁾前稿でも、このように限定的に捉えることによって、『源氏』における否定的な扱い（物語を作る方法としては重視）の理由が明らかになることを述べた。

一般的に陰陽道とは中国よりそのままの形で伝来したとされているが、中国に陰陽道という名称や宗教体系はない。確かに占いや祭祀は中国の陰陽・五行家説に起源をもつものが多いが、道教や密教の影響もあり、そこには日本的な宗教観に基づくところの選択と展開があった。その名称は（中略）暦道や天文道とともに十世紀頃から一般化したもので、明経道や紀伝道がその学派や学術を指すように、陰陽道も陰陽寮出身の呪術宗教家陰陽師グループやその担う学術・宗教を意味するものであったといえる。ゆえに平安時代に成立した陰陽道の内容は、陰陽師達の職務範囲を示すものとなるが、それは大きく分けて、占術、日時・方忌の勘申、呪術祭祀の三つにまとめられる。

以下、この陰陽師の職務の分類を目安に、三つに分けて用例を見ていく。

一、日時・方角等の吉凶（凶会日と方違）

(1) 日時等の吉凶

『源氏』には、「暦の博士」(陰陽寮の官名、広義の陰陽師)が吉日を勘申した例と、光源氏や薫らが自ら暦を見て判断した例とが、合わせて十例余り見られ、他作品にも次のような例がある。⁽⁵⁾特に『栄花物語』は他にも「吉日(よきひ)」の明記が二十箇所ほど見られるのだが(すべて正篇、他に後掲⑩等がある)、時代的には一部重なる『枕草子』には見当たらない。

①「この十九日、よろしき日なるを」と定めてしかば、これ(養女)迎へにものす。

〔蜻蛉〕下・二八四・天禄三年二月、その他三二九等に「よき日」がある

②正月晦日に、よき日ありけるに「物詣する人ぞよかなる」とて、三、四の君、北の方などして、忍びて清水にまうづ。
〔落窪〕二・一七〇⁽⁷⁾

③(済時が)「かの宮(昌子内親王)は宝いと多く持たせたまへる宮なり。故朱雀院の御宝物はただこの宮にのみこそはあむなれ。この宮(永平親王)は幸ひおはしける宮なり。宝の王になりたまひなんとす」とて、吉日して参り初めさせ給へり。
〔栄花〕月の宴(1)七九・天禄二年

④そのころ吉日して、故北の方(高階貴子)の御墓を拜みに、帥殿(伊周)、中納言殿(隆家)もろともに桜本に詣らせたまふ。
〔栄花〕浦々の別(1)二九四・長徳四(史実では三)年十二月

また『枕草子』には、『源氏』(葵(2)二七)や『栄花』(楚王のゆめ(2)五二三)のような、陰陽師(後者は安倍吉平)

による「吉時」の勘申も無い。そもそも『枕草子』の日記的章段は、知られるように日付があいまいであると共に、時刻表記もあまり無いのである。

一方、忌むべき日時等については、次の一例がある。

【二四六】ことに人に知られぬもの。凶会日（くゑにち）。人の女親の老いにたる。（全文）

儀鳳曆以下の具注曆注で、大歳位等に当たらない単陽・単陰・陰陽衝破・陰陽交破など二十数種の総称。上吉日と重なっても用いるべからずとされる。月（節切）ごとに決まった千支の日で、月に三日（正月など）から十五日（九月）に及ぶため、「ことに人に知られぬもの」ともいわれる。なお仮名曆には「くゑ日」と注される。

（史料・研究は略す、角川書店『平安時代史事典』凶会日の項、小坂眞二氏執筆）

『和泉古典叢書』の本段の頭注にも「年間七十九日ばかりもあり」と記されているように、『枕草子』の注釈書では該当する日（『拾芥抄』下末・諸事吉凶部第三十八参照⁽⁸⁾）の多さが、「ことに人に知られぬ」理由としてよく指摘されている。確かに、『紫式部日記』寛弘六年正月一日条（一八七、敦成親王の戴餅停止）にも見える「坎日」（具注曆では「九坎」、正月は辰、など各節月に一種類）などと比べると多いし、また、「単陽」以下の総称であって（曆序参照）、具注曆に「凶会」と注されているわけではないのだが、曆を見ればわかる。逆に言うと、曆を見なければわからない凶日なのである。『口遊』にも坎日・帰忌日・往亡日・復日等の凶日の暗記法があるが、凶会日は見えない。『宇治拾遺物語』五―七「仮名曆あつらへたる事」や現存最古の『中右記』紙背の嘉祿二年（一二二六）の仮名曆では、「かんにち」「かむ日」等と共に「くゑにち」「くゑ日」と明記され⁽⁹⁾、女性にも身近な凶日になっていることがわかる。藤本勝義氏は【二四六】が当時は仮名曆が無かったことを端的に表していると言われている⁽¹⁰⁾。節月によって数が変わる、干支の組合せであるなど、複雑で具注曆を常に参照しなければわからないので、一切の行動が規制される

大凶日であるにも関わらず、限られた人以外には知られにくいということであろう（『枕草子解環』に同様の指摘がある）。

「ことに人に知られぬ」ということは、裏返せばその他については知られている、知っているということであるが、『枕草子』ではそれらの凶日は、取り上げるべきものではなかったのである。そして、唯一取り上げた凶会日も、軽視される点に注目したものであった。

また他の作品には、忌むべき日そのものだけではなく、次のようにある人が「日次」を気にする様子が描かれている。夕霧（母は藤原氏）に関しては、更に二例ある（藤袴(3)三三一、夕霧(4)四三九）。

⑤（遠度の手紙には）「（兼家は）『この月、（結婚には）日悪しかりけり。月たちて』となむ、暦御覧じて、ただいまものたまはする」などぞ書いたる。いちやはき暦にもあるかな、なでふことなり、よにあらじ、この文書く人のそらごとならむと思ふ。

（『蜻蛉』下・三二八・天延二年三月、以下日次に関する記事が続く）
⑥（夕霧が落葉宮を訪ねるのに）坎日にもありけるを、もしたまさに（自分との結婚を）思ひゆるしたまはば、あしからむ、なほよからむことをこそと、うるはしき心に思して、

『枕草子』にはこのような記述も見られない。もちろん、これをもつて直ちに同じ藤原摂関家の一員であっても、道隆らは兼家や道長と異なり日次にはこだわらない性格であった、とは言えない。仮名作品でも前掲④の『栄花』の例（伊周・隆家）がある。しかし、『枕草子』は彼らの「猿楽言」好み（二〇〇）（二七九）（二六三）等）ほどには、それを強調する必要を感じていなかったことがわかる。

さて、定子の「厄年」も『栄花』には記されているが、『枕草子』には見えない。

⑦「それ（懷妊）をうれしと思ふべきにもはべらず。今年は人の慎むべき年にもあり、宿曜などにも心細くのみ言

ひてはべれば、なほいとこそさあらむにつけても心細かるべけれ」などぞ、うち語らひきこえさせたまひける。

〔栄花〕 かかやく藤壺(1)三一二・長保二年三月

⑧宮の御心地悩ましう思されて、今日や今日やと待ちおぼさるるに、今年はいみじう慎ませたまふべき御年にさへ あたれば、いかにいかにと悩ましげにこの殿ばら見たてまつらせたまふに、いとど苦しげにおはします。さるべき祓、御誦経など隙なし。

〔栄花〕 とりべ野(1)三二五・長保二年十二月

当時の「厄年」（『宇津保』楼の上・下・九〇二は「やくね」とする）は、「十余三、廿余五、卅七、卅九、六十一、七十三、九十一（謂之厄年）」（『口遊』人倫門）つまり生年の十二支の年であり、長保二年（一〇〇〇）に定子が二十五歳であったという説（『大鏡裏書』等）には合う。しかし、『権記』十二月十六日条は、入内した正暦元年（九九〇）を「年十四」とし「崩年廿四」とする。史料的价值から、『権記』に従うべきである（『平安人名辞典——長保二年——』や『新全集』頭注）。『栄花』が実際に二十四歳であった定子を厄年の二十五歳としたのは、おそらく『源氏』薄雲の藤壺死去の年齢（三十七歳）をふまえたものであろう。⑦の「宿曜」（宿曜勘文のうち一年のことを占う行年勘文）のことも、後述するように時期的に早く、『源氏』桐壺・濡標の例（一生を占う生年勘文）をふまえた脚色と考えられる。

『枕草子』には、この年のことを記したと考えられる章段があるが（〔六〕〔九〕〔四六〕〔二二五〕〔三三〇〕〔二七七〕〔二九八〕等¹²）、知られるように年末十二月十六日の定子の嫡子内親王出産後の死（他の妊娠・出産も）そのものを語ることはない。

なお『枕草子』には、次のように密教の星辰供を取り上げたり、七夕以外にも星を取り上げた章段（〔二四八〕〔二三九〕星）があるのが特徴的であるが、宿曜勘文に関するものは見えない。その理由については、陰陽道の禁忌の

場合と異なり、『六』『四六』等に登場する行成でさえ、『権記』によると前年の長保元年十月十六日に初めて宿曜勘文を興福寺の宿曜師仁宗から送られたばかりであるので（翌年正月二十七日には宿曜物忌をしている）、清少納言が全く知らなかった為だと考えられる。

【二八〇】さらさらしきもの。孔雀經の御読經、御修法。（中略）尊星王の御修法、季の御読經、熾盛光の御読經。

②方忌・方違

方角の吉凶についても、『栄花』にはある「吉方（よきかた）」が、『枕草子』には見えない。

⑨そこらの御願の験にや、仏神の御験のあらはるべきにや、（道長の病氣は）所替へさせたまはばおこたせたまふべきよし、陰陽師ども（安倍晴明と賀茂光榮、うたがひ（2）一七三参照）申せば、さるべき所を合せて問はせ給へば、尚侍（綏子）の住みたまひし土御門をぞ吉方と申せば、渡らせ給ふ。（中略）いと久しう悩みたまひて、おこたせたまひぬ。

（『栄花』とりべ野（1）三三四・長保三年（二年四月から六月末の病のことか））

⑩吉平（晴明男）も涙にむせて（中略）「今日こそは、まづ（嬉子の遺骸を）納めたてまつらせたまふべき日」にさぶらふめれ。（中略）（道長が）問はせたまへば、法興院は吉方にさぶらふめり、今宵法興院におはしますべう申す。御葬送は、この月十五日と申す。

（『栄花』楚王のゆめ（2）五一・万寿二年八月六日）

方角禁忌については、加納氏が夙に『蜻蛉』『源氏』の他、『大和物語』八・八九・一〇三段、『平中物語』二五段、『枕草子』【二二】【七八】、『和泉式部日記』（三三、六七）、『栄花』、『浜松中納言物語』巻四の例と、「土忌み（犯土）（『蜻蛉』下・三〇八・天禄三年、『更級日記』三〇〇、その他『堤中納言物語』はいずみ・四七九や『狭衣物語』一・一二五～一二九、『浜松』三・二三四にも見える）を取り上げられ、『蜻蛉』の方忌については、具体的にどの方角神を忌むのかを明らかにされている。うち「ふる年に節分するを、『こなたに』（下・三六〇・天延二年十二月）

とあるのは、節分方違の為の誘いであるという。

『枕草子』中の方忌・方違は、右の二段を含め四例である。節分方違に関する二例を先ず掲げる。

【一二二】すさまじきもの。（中略）方違に行きたるにあるじ（饗応）せぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。

【二八三】節分方違などして、夜深く帰る、寒きこといとわりなく、頗などもみな落ちぬべきを、からうして来着きて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所もなくめでたきを、こまかなる灰の中より起こし出でたるこそ、いみじうをかしけれ。

四季の移り変わる日。二十四節氣のうち立春・立夏・立秋・立冬の前日をいう。方角神の大将軍神は三年ごとの立春の日、王相神は四季ごとに所在の方角を変え遊行すると考えられたので、平安時代には（二八三）冒頭を引く、略）などあるように、貴族たちはあらかじめ行動の自由を得るために、節分の夜にしばしば方違を行った。（以下・史料・研究は略す、角川書店『平安時代史事典』節分の項、山下克明氏執筆）

共に立春前日の節分とされることが多いが、増田繁夫氏は、立夏（四月節）・立秋（七月節）・立冬（十月節）前日だけでなく、『帥記』永保元年（一〇八二）十一月十三日条（十四日が冬至〓十一月中）の「違節分」の「小屋」での「夜宿」の例など、各月の節と中に入る前を指した例を挙げ、合わせて、他の家で一泊せずに、車中のまま夜明けの寅の刻を待つて帰宅する場合もあったことを明らかにされている。¹⁴確かに、立春前日の例が多く、特に【二八三】は寒さからも立春前夜の可能性が高いが、そのみに限定はできないだろう。いずれにしても『枕草子』では、方違自体は当時の風俗の一つとして素直に受け入れられている。但し、和歌で方違が詠まれる際に取り上げられる夜具ではなく、同じ主のもてなしでも食事を取り上げた点が、特徴的である。

他の二例は日記的章段であり、一般論ではない。【七八】が長徳二年（九九五）、【一五六】が前年のことである。

【七八】返る年の二月廿よ日、宮の職へ出でさせ給ひし御供に参らで、梅壺に残り居たりしたる日、頭中将（斉信）の御消息とて、「昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがりければ、方違になんいく。まだ明けざらんに帰りぬべし。」（中略）と宣たまへりしかど、（中略）「西の京といふ所のあはれなりつること。（後略）」

「二月廿よ日」は、三卷本勅物の「長徳二年、信経記廿三日甲午、明後日臨時奉幣、八省行幸、中宮退出職御曹司、不御輦車、永宣旨人、但車尋常檳榔毛也」から、長徳二年二月二十三日とするものと（『角川文庫』『和泉古典叢書』等、A説とする）、二十五日の臨時奉幣当日とするもの（『大日本史料』『解環』等、B説）がある。また、方塞がりについては、『解環』に「二十三日甲午から六日間、天一神が南方に遊行するので、斉信は、鞍馬寺からほぼ正南に当たる内裏に帰ることを避けて、いったん西の方へ行き、角度を変えて（方違え）、内裏に帰参こととしたのである」とある。このあたりの暦注の一部を抜き出すと次のようになる。⁽¹⁵⁾「」内に太白神（『大和』八段の「ひと夜めぐり」）の方角を補った。

22日癸巳 大將軍還南、天一天上、忌遠行、重〔南東〕

A 23日甲午 大禍、三宝吉、（出行吉）〔南〕A 定子職御曹司退出○、斉信鞍馬参詣△

24日乙未 五墓、血忌、復〔南西〕 斉信西京方違×

B 25日丙申 春分、二月中、歳徳、（神吉）〔西〕 斉信未明内裏帰参 B 定子退出△、斉信参詣

26日丁酉 歳下食、厭〔北西〕 斉信西京方違

27日戊戌 月殺〔北〕 斉信未明内裏帰参

まず方角神については、暦注にあるように二十二日「癸巳」から天一神（『源氏』帚木の「中神」）は天上に在るの

で、ここでは無関係である（院政期以降の金神の忌も無関係）。しかし大將軍が同じく「癸巳」に本宮（長徳二年申年から三年間は南）に還るので、西に遊行する二十九日「庚子」までは確かに南が塞がっている。よって「解環」の後半に言う通り、斉信は方違を行った。

また、「小右記」によると、定子の「行啓」は当初二月十一日「壬午」に予定されていたのが延引したもので（元の担当者は藏人頭斉信）、三月四日「甲辰」には職御曹司から、更に二条北宮に「出御」している。「壬午」「甲辰」共に移徙吉日・出行吉日であることからすると、同じく両吉日の「甲午」に退出したとするA説が捨てがたい。しかし、二月（節月）の「午」は凶日の大禍日（たいかちに）であるし（『御堂関白記』長和二年六月二十七日条に「件日唯可忌三_三宝_宝歟」とある）、太白山が南西に在る日（暦日で四のつく日）に、鞍馬から西京に行けるのかという疑問も残る。その点でB説は問題が無い。『権記』長徳元年十月十日癸未条「中宮御読経結願（参_参栴_栴）」。女院・中宮出給。自明日有（石清水行幸の）斎也」のように、何かの影響を受けた定子の職御曹司退出が吉日以外の例もあるので、B説が適当だと考えられる。

もう一例も斉信関連章段であり、神事の為の定子の退出に関わる。

【一五六】故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大祓といふことにて、宮の出でさせ給ふべきを、職の御曹司を方あしとて、官の司の朝所に渡らせ給へり。（中略）翌朝、見れば、屋のさま、いと平に短く、瓦葺にて唐めき、様ことなり。（中略）なかなか珍しくてをかしかりしかば、女房、庭に下りなどして遊ぶ。前栽に、萱草といふ草を、籬結ひて、いと多く植ゑたりける、花の、きはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしき所の前栽にはいとよし。時司（陰陽寮の漏刻を掌る役所）などはただかたはらにて、鼓の音も、例のには似ずぞ聞こゆるを、ゆかしがりて、若き人々廿人ばかり、そなたに行きて、階より高き屋にのほりたるを、これより見上ぐれば、あ

る限り薄純の裳、唐衣、同じ色の単衣襲、紅の袴どもを着てのほりたるは、いと天人などこそいふまじけれど、空より下りたるにやとぞ見ゆる。(中略) 八日ぞ帰らせ給ひければ、(後略)

本段についても、勘物「長徳元年六月廿八日、中宮御官朝所」により、大祓の行われる晦日の二十九日の前日に、本年四月十日の父道隆の死により重喪中の定子が退出したことが知られている。「方あし」については、大將軍は正暦四年(九九三)巳年以來東に在るが、二十五日「庚子」より西に遊行しているので、問題は無いだろう。また、天一神は十八日「癸巳」より翌七月四日「戊申」まで天上に在るので、やはり無関係である。二十八日は太白神が北東に在り(二十九日は天)、内裏から職御曹司は東北東に当たるので可能性があるが、【七八】の大將軍の忌ほど確かなものではない。

一般に方達は思いがけない人との出会いをもたらすものであるが、ここでは、場所そのものが発見の対象であった。人ではなく物との出会いとも言える。陰陽寮の鐘楼や左衛門の陣に女房達が行ったことは、勘物「小野右府記七月五日、中宮女房、昨日登陰陽楼。又向侍従所、巡見。四位少将明理、直衣・烏帽子陪従。左衛門陣官等、見之奇之」(『小右記』逸文)で確認されている。

なお、ここまで見た限りでは、本段は史実をそのままを描いただけのようである。しかし、この後の部分は史実と合わない点がある。「この四月のついたちごろ」、頭の中将齊信が登華殿の「細殿」から帰る際に誦んだ詩句が七夕のものであることを清少納言が咎めた。七夕の折にこのことを言いたいと思っていたが、天皇への嘆願も虚しく宰相になつてしまったので、「いかでかはそのほどに見つけなどもせん」と心配していたところ、「七日に参り給へりしかば、いとうれしくて」、明日誦むべき詩を尋ねると、すかさず四月の詩をと答えた。齊信が賞賛され、四月に同席しながら気付かない宣方が非難されている。しかし史実では齊信の任参議は翌長徳二年四月二十四日(伊周・隆家左遷の日)

なので、注には「作者の思いちがいか、わざと一年前の話にしたもの」とある。いずれかは決めたいが、蔵人頭のままであれば、今まで通りやって来て女房達とのやりとりをする機会も多いわけで、「月ごろ、いつしか」と思い続けた不安と期待や、その日に会えて問答が成就した嬉しさが半減するのは確かである。

さて方忌との関係では、公卿になった斉信が来やすい場所としては職御曹司でもよく、右の問答に関して退出先がいつもと異なる朝所であったことはあまり意味がない。但しその庭に、人に憂いを忘れさせてくれる草であり（『文選』嵇康・養生論その他）、喪服の色にもなる（『源氏』幻）「萱草」が生えていたというのは、本来「四月」の道隆の死を忘れない状況下にある（例えば皆喪服）彼女達には、相応しすぎるのではないか。⁽¹⁹⁾退出自体は史実であるが、右のように再構成していることからすると、方忌によって珍しい場所に行つたことを、語る際に利用しているとも考えられるのである。

最後にもう一つ、方角禁忌に関わるものを挙げておきたい。陰陽道の八卦忌（はつかいみ）⁽²⁰⁾のうち、衰日（すいにち）は「御忌の日」「御忌日」として『栄花』に見られるが（楚王のゆめ⁽²⁾五二三、たまのかざり⁽³⁾一三四～一三五）、これは例外的で、仮名作品には普通見られない。一方、古記録や故実書などには衰日・衰時や、凶方の遊年・禍害・絶命・鬼吏、吉方の生氣（しょうげ）・養者・遊年・天医が散見し、これらに関する知識は、少なくとも平安中期は男性貴族のみに知られていたようである。うち第一の吉方である生氣は、いわゆる吉方詣を含め迎春の年中行事と出産儀式や通過儀礼に用いられることが多い。元三の供御薬（みくすりをぐうず）⁽²¹⁾の儀もその一つで、天皇は自らの生氣の方角の色の衣を着用する。そして、それに奉仕する女官達は女童（薬子）に至るまで、同じ色の衣を着た（『延喜式』卷三十七・典藥寮、『朝野群載』卷十五・陰陽道『元日御薬童勘文』等参照）。これは、生氣方の知識が無くとも見ればわかる。よって、「所得」ている理由は、天皇の前に屠蘇散を嘗めるという役割だけでなく、同じ色の

衣であるということも考慮すべきだと思われる。天皇と同じ「青色」を着られる藏人を羨む気持ちが続り返される『枕草子』なら、なおさらである（二二）【八四】【二九六】等）。

【二五二】えせ者の所得る折。（中略）元三の薬子。卯杖の法師。御前の試みの夜の御髪上。節会の御陪膳の采女。なお、屠蘇を嘗める時も生氣の方を向いた。餅鏡を見る場合（『栄花』（2）三八）なども同様である。八卦忌の吉凶方は、出行や修造にも関わるが、それ以外の、単に向かなくてはならない（向いてはならない）という場合が多い。

二、呪術・祭祀関係（祓）

陰陽師の行う呪術（祓・呪詛・反問等）や祭祀については、次のような例がある。⑫⑬は『栄花』（はつはな（1）四〇一―四〇二）に引用されている。但し後者は「御祈りの人々、陰陽師、僧などにみな祿たまはせ」とあり、「医師」が省かれている。また前者は、⑧と共通する場面である。占い（三章）の結果に基づいて行われるものが多いが、便宜的に先に見ておく。

⑪（作者の病氣は）かくて、なほおなじやうなれば、祭・祓などいふわざ、ことごとしうはあらで、やうやうなどしつ、六月つごもりがたに、
〔『蜻蛉』中・一七八・安和二年六月〕

⑫（土御門第には）月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず、山々寺々をたづねて、騷者といふかぎりは残るなくまゐりつどひ、三世の仏もいかに翔りたまふらむと思ひやる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。〔紫式部〕一三〇・寛弘五年九月十日条）

⑬殿も上も、あなたに渡らせたまひて、月ごろ御修法、読経にさぶらひ、昨日今日召しにてまゐりつどひつる僧の布施たまひ、医師（くすし）、陰陽師など、道々のしるしあらはれたる、祿たまはせ、うちには、御湯殿の儀式

など、かねてまうけさせたまふべし。

〔紫式部〕一三六・寛弘五年九月十一日条、若宮の誕生の日

仮名作品には、年中行事の追儺（『蜻蛉』中・二六八・天禄二年十二月、『紫式部』一八五、『荣花』月の宴⁽¹⁾七二、『源氏』等）以外は、鬼気祭、招魂祭、泰山府君祭や本命祭（なお、『後撰集』一三七六詞書の「年星」は密教の本命供である）等々の具体的な祭の名前は見られず、⑪のように総称で書かれる場合が多い。『紫式部』⑫⑬は、『源氏』で「陰陽師」が無力に描かれているのと対照的であるが、あくまでも事実を記録したためであって、僧や医師（くすし）⁽²²⁾と共に陰陽師を重んじているのは、道長である。⁽²³⁾

『枕草子』には、陰陽師の日時・方角禁忌の勘申もなく、祭もない。かろうじて陰陽師が登場するのは祓である。祓は、『伊勢物語』にも「陰陽師、神巫（宇津保）でもよく併記される」よびて、恋せじといふ祓の具」を持っていき、させたが効果が無く、「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」と詠んだ章段があり（六五段、陰陽道に関わる唯一の例か）、『大和』一四八段（葦刈り）の津の国難波の祓や、『平中』三五段の津の国「ながすの浜」の祓など、例が多い（『宇津保』にも各地の祓が散見する、三月上巳の祓もあり）。『蜻蛉』は⑪の他、唐崎の祓が有名である。しかし、次の『枕草子』の河原はおそらく加茂川（東河）であろう（勉誠出版『枕草子大事典』本段・島田俊男氏執筆）。「七瀬の祓」が行われる為に、「七瀬川」とも呼ばれた（五九）「川は」の「解環」。

〔二八〕心ゆくもの。（中略）物よく言ふ陰陽師して、河原に出でて、呪詛の祓したる。

陰陽師の職務の一つが病氣の原因の占い（病事占）であり、原因が「呪詛」と占われた場合は、祓を行った。この「呪詛」も陰陽師が行う呪術の一つである。『枕草子』以前では、『宇津保』にも明記されている（春日詣一四七等）。

〔百鍊抄〕長徳元年八月十日条「呪詛右大臣（道長）之陰陽法師、在高二位法師（高階成忠）家。事之体、似内府（伊周）所為者」や、『小右記』長徳二年三月二十八日条「早朝参女院（詮子）、謁右大臣。院御惱昨日極重。（中略）

又（道長が）云、或人呪詛云々。人々厭物自寢殿板敷堀出云々」及び四月二十四日条「仰配流宣命事（射花山法皇事、呪詛女院事、私行大元法事等也）」などの、伊周（寛弘七年正月二十九日薨、三十七才）や成忠（長徳四年滅）の振る舞いやその報いからすると、『枕草子』では「呪詛」は禁句ではないのか。なお中関白家の中でも特に伊周に対して批判的な「栄花」は、この間のことについて、「呪詛」とは明記しないが、「太元帥法」を含む伊周・成忠による祈禱について繰り返し述べている（後掲⑩参照）。『宇津保』（嵯峨の院・一六七）には「人呪ふ人は、三年に死ぬるなり」とある。しかし、『枕草子』には大きな不幸を暗示させる事柄を取り上げ、読者を挑発するような章段があるので、これも敢えて書いたのかもしれない。また、呪詛そのものではなく、取り除く点を取り上げたことにも注目しておきたい。

【一〇五】見苦しきもの。衣の背縫ひ、肩に寄せて着たる。また、のけ領したる。例ならぬ人の前に、子負ひて出て来たる者。法師陰陽師の、紙冠して祓したる。色黒う、にくげなる女の鬢したると、鬚がちにかじけ、痩せ瘦せなる男、夏昼寝したるこそ、いと見苦しけれ。何の見るかひにて、さて臥いたるならん。

【二八五】陰陽師のもとなる小童部こそ、いみじう物は知りたれ。祓などしに出でたれば、祭文など読むを、人はなほこそ聞け、ちうと立ち走りて、「酒。水沃かけさせよ」とも言はぬに、しありくさまの、例知り、いささか主に物言はせぬこそ、うらやましけれ。さらん者がな、使はんとこそおぼゆれ。

【三二九】被ひえたる櫛⁽²⁶⁾、あかに落し入れたるもねたし。

法師（形の者）が民間の陰陽師を兼ねて河原で行う祓については、本段や後掲⑮及び『今昔物語集』一九―三「内記慶滋保胤出家語」の前半（「宇治拾遺」十二―四と同話）の播磨国の法師陰陽師の例が知られているが、『枉園抄』や『解環』『和泉古典叢書』が⑭の歌も指摘している。屏風絵になるということから、いかに風俗として知られてい

たかがわかる。また保胤（法名寂心）は、当初から紙冠（「解環」が『年中行事絵巻』『扇面古写経』の三角の紙の例を指摘）を咎めており、それを破り棄てて泣きながら「汝は何で仏の御弟子と成て後に、祓殿の神苦しび給と云て、如来の禁戒を破りて、紙冠をば為るぞ」と責め、妻子を養い生きていく為に仕方がないと聞いても、「然りと云ふとも、何でか三世の諸仏の御首には紙冠をば為む。貧さに不堪して此くし給はゞ、我が此の知識に曳き集たる物共を皆其に進なむ」とこだわり続け、破戒行為を象徴するものと見ている。【二〇五】は見苦しいものを集めており、破戒行為に対する非難の気持ちも根底にあらうが、視覚的な問題として非難している点が『枕草子』らしいといえようか。ちなみに、先に引用した『百鍊抄』や、寛弘六年正月三十日に発覚した高階光子（成忠女、貴子妹）と源方理夫妻を首謀者とする彰子・敦成・道長呪詛事件でも、お抱えの法師陰陽師が呪詛を行っている（『大日本史料』同年二月五日条参照、その一人が道満、但し『栄花』はつはな⁽¹⁾四三八は同年に伊周・高階明順による敦成の呪詛が発覚し、二人とも病死したとする）。このようなあり方が高階家に限らないのであれば、胡散臭さの要因が増える。【今昔】二四一―一六の「隠れ陰陽師」も呪詛を頼まっていた。

川のほとりに女どもありて、法師かみかうふりしてはらへするところ

⑭時しらぬをはり法師の⁽²⁷⁾はらへをばかしらつつめるかみのみや聞く

【能宣集】三三四、書陵部本は二八四、【統詞花集】九八七は初句「もの知らぬ」
弥生のついたち川原に出でたるに、かたはらなる車に、法師の紙をかうぶりにて、博士だちたるを憎みて

⑮祓戸の神のかざりのみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかな
【紫式部集】一四

さて、【二〇五】【二八五】は陰陽師を取り上げたといっても、結局、『枕草子』に繰り返し取り上げられる法師と童の描写にすぎない。後者は清少納言の使用人観を語る箇所の一つでもある（『枕草子大事典』当段・深澤恵美氏執

筆」。陰陽寮の官人やその経験者達の呪術・祭祀活動が具体的に描かれることは無いのである。

三、占術関係（物忌）

(1) 陰陽師の占い

陰陽師は、災害（霖雨・旱魃等）や火事や公的機関の物怪（もつけ、もののさとし、怪異）以外に、個人の為に種々の事柄を占った。平安中期には、式占のうち六壬式盤（ろくじんしきばん）を用いる六壬式占が専ら行われた。⁽²⁸⁾ 晴明撰の六壬式占の書『占事略決』には、「占産期法」「占産男女法」（後掲⑬の「占」に相等）「占待人法」「占盜失物得否法」等の占法も記されている。後には「覆物」の中身を当てるような、占い自体を目的とする例も見られるが、『長秋記』大治四年五月二十日条、『新猿蓑記』十君夫、中心は怪異、病氣、夢見が悪い際の占いである。

病氣については、「靈氣」（物の氣、「邪氣」「邪靈」とも）、「神氣」（社神の祟り）、「土氣」（土公神の祟り）、「狭衣」一・一二九参照）、「鬼氣」（求食鬼など鬼の仕業）、「呪詛」その他の原因や、風病などの病種、病状の軽重、平癒や病没などの時期、転地療養などの除病の方法、医師による投薬の是非も占った。⁽²⁹⁾ また怪異や悪夢については、誰にとつての何の前兆なのか（病氣、口論、火事等）、それに対する予防行為としての慎み（物忌）の期間はいつかが示された。仮名作品にも、陰陽師による病事占、怪異占が見られる。『宇津保』にも具体的に見られるが、『栄花』の例を一部掲げておく。

⑬ 粟田殿（道兼）、夢見騒がしうおはしまし、もののさとしなどすればにや、御心地も浮きたるさまに思されて、陰陽師などに物を問はせたまふにも、「所を替へさせたまへ」申すめれば、さるべき所など思し求めさせ給へど、また、御よろこびなど、一つ口ならずさまさま占ひ申すを、あやしう思さる。この殿の内にかやうのものの兆、

御慎みあることを、内大臣殿聞かせてたまひて、御祈りいよいよみじう。「かくたゆむ世なき御祈りの験にや」と、もの恐ろしげに申し思ひたれば（中略）（輓地療養先は）中川に左大臣殿の近き所なりけり。（相如の）父の内蔵頭助信朝臣といひける人の造りて住みける、池、遣水、山などありて、いとをかしう造りたてて、殿の御方違所といひ思ひたりける家なりけり。

〔栄花〕みはてぬゆめ(1)二二二―二二三・長徳元年四月)

⑬二条殿（兼通第）には北の方、日ごろただにもおはせぬに、このたびは女君と夢にも見えたまひ、占にも申しつれば、殿いっしかと待ち思しつるに、かくめでたき御事（任関白）さへおはしませば、かならず女君と待ち思ひきこえさせたまへるに、かうおはしますを、いかにいかにと殿の内ゆすりみちたり。（同右・二一七）

⑭（道長は）光栄（史実では本年六月七日死去）・吉平など召して、（頼通の病氣について）もの問はせたまふ。御物の怪や、また畏き神の氣や、人の呪詛などさまざまに申せば、神の氣とあらば、御修法などあるべきあらず、また御物の怪などあるに、まかせたらんもいと恐ろしなど、さまざまにおぼし乱るるほどに、ただ御祭、祓などぞしきりなる。

〔栄花〕たまのむらぎく(2)五八・長和四年十二月)

⑮（頼通は）守道召しに遣はすきよし仰せらる。（中略）（妍子の病氣）を問はせたまへば、「御氏神の崇りにや、土の氣」など申せば、御前にて御祓仕うまつる。

〔栄花〕わかみづ(3)九四・万寿四年三月)

前掲⑩も含め、〔栄花〕には安倍晴明（九二二―一〇〇五）と賀茂光栄（保憲男、九三九―一〇一五）、光栄と吉平（晴明男）など、「陰陽師ども」の名前が明記された例が散見する。吉平と守道（光栄男）の組合せも、「御祓の吉平、守道など声も洩れたりつる、皆禄賜ひて、世にめでたきけしきにて、皆まかでぬ」（楚王のゆめ(2)五〇二、後冷泉誕生の御湯殿の儀）以下に見られる。道長が後には⑨の時とは異なり陰陽師の輓地療養の勧め（〔寢覚〕二二・一四八も）を承知せず（うたがひ(2)一七三―一七四）に出家したり、出産後の嬉子薨去の際は守道の招魂祭も甲斐が無く（楚王

のゆめ(2)五〇四・五〇八)、妍子は陰陽師達が癒える日だと占った万寿四年九月十四日に亡くなり(たまのかざり(3)一二九・一三二)、宿曜勘文では十四日は厄日)、また遡ると、道綱の妻は勧めに従って「吉方」に行きそこで産死していた(⑬の直後の記事)にせよ、概して「栄花」では陰陽師達が重用され、活躍する様が描かれている(「寢覚」『浜松』でも同様の傾向がある)。「御堂関白記」「小右記」「権記」等の記録の通りと言える。「源氏」(柏木(4)二九三)の的はずれな病事占とは対照的である。

一方、「枕草子」には占いについても陰陽師は登場しない。例えば、正暦四年正月二日に一条天皇の急病に祓で対処して晴明が加階したのは(「小右記」)、道隆・定子の知るところであろうが、「権記」「御堂関白記」「小右記」を史料とした、光栄の活動一覧表や晴明のそれを見ても、中関白家に直接関係するものは見えない。⁽³⁰⁾長保四年三月九日の光栄による敦康親王の上巳の祓(「権記」)も定子の死後のことである。よって、晴明・光栄という当時の双壁が登場しないのは実際に接点が無かった為である可能性が高いが、彼らに限らず描かれていない点は、別の理由があると考えられる(後述)。

(2) 物忌

「枕草子」も「蜻蛉」「源氏」と同様に陰陽道に関する禁忌の中では物忌の例が最も多い。物忌期間(怪異発生後何日間といくつかの節月の十干による連続二日間、二・三種類の物忌が連続すると四日・六日になる、「蜻蛉」に散見、実質や行成の例も日記に見える)は、前述のように六壬式盤を用いた陰陽師の占いに基づくが、慎しみの行為(「籠居」自体には関わらない。物忌同士や方違や陰陽師と連続して出てくる箇所が多いので、前述したものも含め、以下まとまりごとに見ていく。能因本の章段番号を括弧で示した。すべて、三巻本と順序は同じである。

【二〇】(二〇) 清涼殿の丑寅のすみの(中略)「(村上天皇が)御物忌なりける日、古今をもて渡らせ給ひて、御

几帳を引き隔てさせ給ひければ、女御、例ならずあやし、とおぼしけるに、草子を広げさせ給ひて、（中略）『さらに不用なりけり』とて、御草子に夾算さして、御殿籠りぬるも、まためでたしかし。』

【二二】（二二）すさまじきもの。（中略）方違に行きたるにあるじせぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。（中略）人のもとに、わざと清げに書きてやりつる文の返事、今はもて来ぬらんかし、あやしう遅きと待つほどに、あるつる文、立文も結びたるも、いときたなげに取りなし、ふくだめて、上に引きたりつる墨など消えて、「おはしまさざりけり」、もしくは「物忌とて取り入れず」と言ひてもて帰りたる、いとわびしくすさまじ。

間の【二二】（二二）は、「生ひ先なく、まめやかに、えせざひはひなど見てゐたらん人は」で始まる宮仕え礼讃の随想的文章で、理想的な宮仕えの場を語る前段に直結して⁽³¹⁾おり、一連のものと見なすと、物忌が連続して出てくることになる。なお【二〇】は、天皇が物忌中に同じく清涼殿にいる、つまり外宿人ではない女御と会えることが確認できる例である（次の【七七】も）。

【二二】では、相手が物忌であつた為に、念入りに書いた手紙を読んでもらえなかつたことを残念だと言っている。文字を媒介とした他人との心のつながりを重視する『枕草子』の特徴が表れた箇所である。『蜻蛉』の物忌中の手紙のやり取りと相手に対する思いとの関係についての指摘を、引用しておく。⁽³²⁾

『蜻蛉日記』の物忌に感じる問題は、作品に見るかぎり、兼家と道綱母との夫婦関係で、物忌が終始厳格に守られていることである。尤も『終始厳格に』には多少語弊があり、たとえば、結婚当初では、「こゝにものいみなるほどを、心もとなげにいひつ、」（上・一一四頁）『御ものいみなれど御門のしたよりも』（中・二二七頁）と手紙を交すこともあつたが、後には、「けふあすはものいみ」とか「へりごとなし」（下・二八四頁）『ものいみなにやとおりあしとて、え御覽ぜさせず』（下・二九九頁）のようであつて、むしろ厳格になつていったと言つ

てよく、兼家の心の冷却が読みとられる。

他に、「その五六日は例の物忌と聞くを、『御門の下よりなむ』とて、(火事見舞いの)文あり。なにくれとこまやかなり。いまはかかるもあやしと思ふ。」(蜻蛉)下・二八七・天禄三年二月二十五日)などの例もある。但し、物忌中は外から来たものに対しては忌むべきだが、内側から働きかけることに關しては問題が無かつたらしい。³³⁾

【七七】(八六)頭の中將の、すずなる虚言を聞きて、(中略)(長徳元年)二月つごもりがた、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて、『さすがにさうさうしくこそあれ。物やいひやらまし』となん宣たまふ』と人々語れど(中略)日ひと日、下に居暮して参りたれば、夜の御殿に入らせ給ひにけり。

【七八】(八七)返る年(長徳二年)の二月廿よ日(中略)「昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがりければ、方違になんいく。まだ明けざらんに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたうたたかせで待て」

【七九】(八八)里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからず人々はいひなすなる。(中略)夜いたくふけて、門いたうおどろおどろしうたたけば(中略)「あす、御読経の結願にて、宰相の中將御物忌に籠り給へり。妹のあり所、申せ申せと責めらるるに、ずちなし。(中略)いかに。仰せに従はん」といひたる。返り事は書かで、布(海藻)を一寸ばかり紙に包みてやりつ。さて後、来て、「一夜は責めたてられて、すずなる所々になん、率て歩りき奉りし。まめやかにさいなむに、いとからし。(中略)とりたがへたる」と言ふ。

右三段は、時間の順序通りに並んでおり、政治的な背景のある一連の斉信関連章段であるが、物忌や方違が出てくるといふ点でも共通している。かつての夫則光との別れを語った後、【八〇】(八九)「物のあはれ知らせ顔なる物。湊たり、間もなうかみつ、物言ふ声。眉ぬく。」(全文)と、『枕草子』特有のオチ(肩すかし)があることから、一連の執筆と考えられる。【七七】【七九】共に、一条天皇の物忌の為に斉信が候宿したものである。

【七七】には「頭中将の宿直所に、少し人々しき限り（宣方ら）、六位まで（則光ら）集りて、よろづの人の上、昔今と語り出て、言ひしついでに『なほこの者（中略）今宵、あしとよしとも定めきりてやみなむかし』（略）」とあり、女性を論じる場という点でも、雨夜の品定めと同様である。知られるように「草の庵をたれたかたづねん」（白詩句「廬山の雨の夜、草庵の中」）を踏まえた返歌で、清少納言は棄てがたきものとして再認識される。

【七九】も則光が同宿している。斉信に退出先を教えるよう責められ、清少納言からの海藻の返事の意味も以前の会話を忘れていて理解できず、困ってあちこち引つ張り回してごまかしたというのが、翌日、天皇の物忌中の御読経結願に奉仕する為に候宿していた斉信は、いつ内裏をぬけだしたのだろうか。後掲【一三一】の行成の発言や、『権記』寛弘元年十二月二十一日条「帰家。又参内。依御物忌、丑剋参上」によると、前日ぎりぎりの丑の刻以前に参上し、宿さなければならぬ³⁴。本段では、かなり深夜に手紙を出し、返事があつた後に連れ出したが、しかし丑の刻以前には二人は内裏に戻っていた、ということであろうか。不審である。『解環』は連れ出したのは翌日以後と見なければならぬと言いが、「一夜」はやはり当夜を指しているのではなからうか。事実そのままではなく表現効果を第一と考えた結果と見たい。

【九四】（二〇三）くち惜しきもの。（中略）節会などに、さるべき御物忌のあたりたる。

本段の前後には、陰陽道関係の記事は無い。『紀略』長徳二年正月一日「壬寅」条に「節会。天皇依御物忌、不出御南殿」とあるように、物忌に当たると節会自体は行われるが天皇は出御しなかった。節会ではないが、長徳四年十一月十六日に吉日勘申をさせた上で、翌十二月十七日「壬寅」に登華殿で行われた修子内親王の着袴にも、天皇は物忌の為に渡御しなかった（『権記』）。『紫式部』にも、天皇が物忌の為に賀茂の臨時祭の還立の神楽が「さまばかりなり」（二八四・寛弘五年十一月二十八日乙酉条）と簡略化されたことが見える³⁵。但しがつかりした様子は見られず、

老齡で舞人を務めた尾張兼時に同情を寄せている。

【一三二】（二三九）頭の弁（行成）の、職に参り給ひて、物語などし給ひしに、夜いたうふけぬ。「あす御物忌なるに、籠るべければ、丑になりなばあしかりなん」とて参り給ひぬ。翌朝、藏人所の紙屋紙ひき重ねて、

【一三三】（二四一）円融院の御果ての年（正暦三年）（中略）雨のいたう降る日、藤三位（繁子）の局に、糞虫のやうなる童の大きなる、白き木に立文を付けて、「これ奉らせん」と言ひければ、「いづこよりぞ。今日明日は物忌なれば、葎もまゐらぬぞ」とて、下は立てたる葎より取り入れて、さなんとは聞かせ給へれど、「物忌なれば見ず」とて、上につい差して置きたるを、つとめて、手洗ひて、「いで、その昨日の巻数」とて、請ひいでて、伏し拝みて開けたれば（中略）これを、上の御前、宮などにとく聞こしめさせばや、と思ふに、いと心もとなくおぼゆれど、なほいと恐ろしいひたる物忌し果てむとて、念じ暮して、

【一三四】（二四二）つれづれなるもの。所去りたる物忌。馬下りぬ双六。除目に司得ぬ人、家。雨うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。（全文）

【一三五】（二四三）つれづれ慰むもの。碁。双六。物語。三つ四つの児の物をかしう言ふ。また、いと小さき児の物語し、たがへなどいふわざしたる。果物。男などのうち猿がひ、物よく言ふが来たるを、物忌なれど、入れつかし。（全文）

【一三二】は、一条天皇の物忌に備えて、行成が前夜のうちに参内し候宿した例である。「夜をこめて」の贈歌が知られている。【一三三】（二四〇）も清少納言の「この君（具竹）」の秀句が話題になる、職御曹司を舞台とした行成の登場する章段であり、前段と一連のものと見なせる。よって、【一三一】から連続して物忌が見えることになる。【一三三】は清少納言の登場しない（出仕前）の日記的章段で、一条天皇の乳母の物忌中の出来事である。物忌と手

紙との関係については前述した（二二二）。繁子が手紙は受け取るものの、陰陽師に今回は重く慎むようにと言われたのに従い、熱心に物忌を行う様子が描かれている。【一三四】【一三五】は一对の章段で、共に物忌に言及する。「所去りたる物忌」（自宅以外での物忌）は、『源氏』（浮舟⁽⁶⁾一五三、但し方便の例）や『寝覚』（一・四九）などからも、重い（固い）物忌⁽³⁶⁾である可能性が大きい。

【一五六】（二六五）故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大祓といふことにて、宮の出でさせ給ふべきを、職御曹司を方あしとて、官の司の朝所に渡らせ給へり。（中略）内の御物忌なる日、右近の将曹、光なにとかやいふ者して、（宣方が）畳紙に書きておこせたるを見れば、「参ぜむとするを、今日明日の御物忌にてなん。（後略）」

本段（長徳元年四月～七月）は、時間的には前掲【七七】（長徳元年二月）と【七八】（同二年二月）との間である。前半の斉信との問答については方忌のところを取り上げ、萱草の描写や斉信の任参議の時期が創作的であることを述べた。その後半に、参議になつて清少納言と接する機会が減つた朗詠の名人斉信の代わりを、宣方が務めようと努力したという話が記されている。【七七】【七九】と同じく一条天皇の物忌であるが、宿直しているのは、その宣方である。

【二七九】（二八二）宮にはじめて参りたるころ、（中略）昼つ方、（中略）（伊周が）「昨日、今日、物忌に侍りつれど、雪のいたく降り侍りつれば、おぼつかなさになん」と申し給ふ。「道もなし、と思ひつるに、いかで」とぞ御返ある。うち笑ひて、「あはれともや御覧するとて」など宣たまふ御有様ども、これより何事かはまさらん（中略）ものなど仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ御答に、「いかかは」と啓するにあはせて、台盤所の方に、はなをいと高うひたれば、「あな心憂。虚言をいふなりけり。よしよし」とて、奥へ入らせ給ひぬ。（中略）ともかくもえ啓し返さで、明けぬれば、下りたるすなはち、浅緑なる薄様に艶なる文を、「これ」とて来た

る、あけて見れば、「いかにしていかに知らまし偽を空に糺の神なかりせば　となん、御気色は」とあるに、めでたくもくち惜しうも思ひ乱るるにも、なほ、昨夜の人ぞねたく、にくままほしき。「薄さ濃さそれにもよらぬはな（花・鼻）ゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき　なほ、こればかり啓し直させ給へ。式の神もおのづからいとかしこし」とて、参らせて後にも、うたて、折しも、などてさはたありけん、いと嘆かし。

まず「式の神」であるが、『新猿楽記』十の君の夫や『大鏡』『今昔』の例が知られているが、これが初出である。⁽³⁷⁾三卷本はすべて「しきの神」、能因本・前田家本は「しきのかみ」である。『宇津保』にも見えず、他の仮名の例と比べると早いので、唐突の感もあるが、当時くしゃみが凶兆とも吉兆ともされたことから、古い用の式盤の守護神と考えられた式神を持ち出したと解されている（『和泉古典叢書』他）。六壬式盤ではないが、九世紀の陰陽頭兼陰陽博士である滋岳川人の太一式盤について、陰陽頭惟宗文高が「故（文）道光宿祢伝領、常奉安置家中。是靈驗物也。尚在或法師許之由」を語ったという（『左経記』長元元年四月五日条）。もちろん、定子の歌の「糺の神」に対応している（定子は清少納言を引き止める際にも「葛城の神も、しばし」と言っていた）。

諸注、『二五』「にくきもの（中略）はなひて誦文する」の箇所には、『二中歴』巻九のくしゃみをした時の呪文「休息万命、急急如律令」を挙げる。これは陰陽道書では未確認だが、用語や内容から道教や陰陽道のものとわかる。⁽³⁸⁾なお、長祿二年（一四五八）賀茂在盛撰『吉日考秘伝』百怪吉凶第六十七の中に「占噴嚏（ふんてい）法」があり、「子日〈有酒食〉　丑日〈主憂疑〉　寅日〈有外事〉　卯日〈至大吉〉　辰日〈婚会吉〉　巳日〈主口舌〉　午日〈有喜事〉　未日〈至尋常〉　申日〈有客至〉　戌日〈女思念〉　亥日〈有人思〉」とあり、遅くともそのころには陰陽道の占いに組み込まれていた。

さて、『二七九』は伊周の物忌で、『枕草子』中、これが唯一の中関白家の人々の物忌の例である。道隆や定子の物

忌は書かれていない。⁽³⁹⁾ 一方『紫式部』には彰子の物忌が一例ある（一八四・寛弘五年十二月二十九日乙卯条）。伊周は今日まで物忌中であり、外出や外宿人（外人とも）との接触を控えるべきだが、大雪なので定子のことが心配になり雪見舞いをした。それに対して定子が古歌を引いて感謝の気持ちを述べ、伊周がまたその歌をふまえて応えたという場面である。伊周と陰陽道との関係は、史実では前述したように長徳元年及び二年の呪詛が知られ、『栄花』には寛弘六年の呪詛や④の「吉日」の墓参の記事もあるが、『枕草子』は物忌を取り上げたものの、相手の為にそれを破ったことを描いている。しかも、最も印象的な初対面の日の振る舞いとしてである。

【二八三】（二七七）節分方違などして、夜深く帰る、寒きこといとわりなく、願などもみな落ちぬべきを、（後略）

【二八五】（二七九）陰陽師のもとなる小童部こそ、いみじう物は知りたれ。祓などしに出でたれば、（後略）

【二八六】（二八〇）三月ばかり、物忌しにとて、かりそめなる所に、人の家に行きたれば（中略）さかしらに柳の眉のひろごりて春の面を伏する宿かな とこそ見ゆれ。そのころ、また、同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりて、ただ今も参りぬべき心地するほどにしも、仰言のあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君、いとをかしげに書い給へり。「いかにして過ぎにし方を過ぐしけんくらしわづらふ昨日今日かな となん。今日しも千歳の心地するに、晝には、とく」とあり。この君の宣たまひたらんだにをかしかききに、まして、仰言のさま、おろかならぬ心地すれば、「雲の上もくらしかねける春の日を所からともながめつるかな（中略）」とて、晝に参りたれば、「昨日の返し、『かねける』 いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさることなり。

【二八四】（二七八）は「香炉峯の雪」の段であり、⁽⁴⁰⁾【二八三】とは寒い時期の自らの経験という共通点がある。

【二八五】は前段とは直接結びつかないが、一つ前の自らの節分方違に基づく一般論からの連想で、自らの祓の経験

に基づいて陰陽師の使う少年を論じ、更に陰陽師に関わるものとして自らのある日の物忌を記したのであろう。【二八六】の定子との心の交流から、【二八四】へと「回帰」する（「解環」参照）。

【二八六】は一回的な清少納言の物忌としては、『枕草子』中唯一の例である（本段後半は、「同じ物忌」とあるので、十日後あるいは二十日後のこと）。これを一般化したものが、前掲の【一三四】「つれづれなるもの。所去りたる物忌」である。本段では、清少納言の出仕を待ち遠しく思う定子と、早くそれに応えたいという清少納言の思いが描かれている（贈答歌は『千載集』九六六・九六七に「初めて侍りけるころ」のものとして入る）。他所での物忌（方違ではない）は重いはずだが、もちろん手紙は受け取り、直ちに返事をしたという【二二】【二三】（参照）。物忌の記事においても、『枕草子』が主従愛を語る作品であることが表れている。【一七九】の伊周の場合は兄妹愛であり、『枕草子』において、物忌が背景としてではなく具体的な誰かとの心の交流（あるいは断絶）に関わる場合は、共に定子との関係であった。

【紫式部】の彰子の物忌の記事も「心細さ」を語るが、主人に会えれば解消できるというわけではない絶対的、根源的な孤独がある。一方、『源氏』（松風(2)四九二)では、冷泉天皇の「六日間の物忌」によって光源氏と会えないことが、愛情濃やかな贈答歌が交わされる契機（物語の方法）として利用されていた（主従であり親子である）⁽⁴¹⁾。

【和泉】では、「敦道親王が」「今宵はまかりなむよ。たれに忍びつるぞと、見あらはされてなむ。明日は物忌と言ひつれば、なからむもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば」（三八）や、「その日になりて、（女が）『今日は物忌』と聞こえて（紅葉見物に行かず）とどまりたれば」（六五）といった物忌による残念さ、不都合が生じたことが、転じて愛情を確かめあう贈答歌につながっている。また、次のような箇所もある（／は改行箇所）。

②〇所かへたる御物忌にて、忍びたる所におはしますとて、例の車あれば、今はただのたまはせむにしたがひてと思

へば、参りぬ。心のどかに御物語起き臥し聞こえて、つれづれもまぎるれば、（宮邸に）参りなまほしきに、御物忌過ぎぬれば、例の所に帰りて、今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられて、わりなくおほゆれば、聞こゆ。／つれづれと今日数ふれば年月の昨日ぞものは思はざりける／御覧じて、あはれとおほしめして、「ここにも」とて、／「思ふことなくて過ぎにし」昨日と昨日と今日になるよしもがな／と思へど、かひなくなむ。なおほしめし立て」とあれど、いとつましうて（中略）うちながめてのみ明かし暮らす。（『和泉』七二―七三）これも「一昨日と昨日」とあり、場所も異なるようなので、「御いとこの三位の家」での「四十五日の忌たがへ」（六七）ではなく、二日間の「所避りたる物忌」だと考えられる。その間会えないのではなく、物忌を破るのではないが、女を迎えて、他者との断絶がある為により親密な時を過ごしている（これを方便として利用したのが『源氏』浮舟(6)一五三の勾宮）。『和泉』では、「方ふたがり」の場合も宮が来ないのではなく、女の抵抗感をよそに外に連れ出すことで逢瀬を可能にしている（三三、六七）。『蜻蛉』では、【二二】で引用したことのほか、兼家が来ない時に、物忌だからと自らを納得させたり、それが無いにも関わらずと絶望したりしていた。加納重文氏が「愛情の緩衝を果たすもの」と呼ばれる通りである。このように、物忌にどう対処するかが、各作品の中心となる人間どうしのその時々の関係を反映している。『枕草子』が定子との関係であるのも、当然であった。

なお、『枕草子』には方便・口実としての物忌も方違も見られない。『落窪』などは、姫君の婚儀を整える為のあこぎによる口実の「恥づかしき人」の四十五日の方違（一・五〇及び五五、『和泉』六七、『栄花』ころものたま(3)四二、『寝覚』一・四九にも）と、同じく口実である落窪の君の物忌（一・七〇）のみで、『源氏』の宇治十帖に継承されている。

(3) その他の「物忌」

以下、その他に「物忌」の語が見られる章段について、まとめて見ておきたい。

【二七七】成信の中将は（中略）物忌くすしう、鶴亀などに立てて、食ふ物まづかけなどする物の名を、姓にてもたる人のあるが、異人の子になりて、平などいへど、ただそのもとの姓を、若き人々、言種にて笑ふ。

これは、中将という女房批判の一節である。その中にあることから、物忌を熱心に行う態度に肯定的でないことがわかる（【二三三】参照）。前掲【一三五】「つれづれ慰むもの」の中の「男などのうち猿がひ、物よく言ふが来たるを、物忌なれど、入れつかし」という、物忌中の所在なさに冗談をよく言う男性が来たら家の中に入れてしまいたいという発言からも、仕方なく籠居している様子がうかがえる。

【紫式部】には、「物忌みける人の、行末いのち長かめるよしども、見えぬためしなり」（二〇四）という縁起をつぐこと一般への批判があり、狭義の物忌についても、賀茂の臨時祭が天皇の物忌中になるのでそれに備えて道長が「宿直」し、「上達部も舞人の君達」も籠もった夜のことを、「夜ひと夜、細殿わたり、いともさわがしきはひしたり」（一八三）と描写し、社交の口実になつてしまふ程度のものでして冷やかに見ている。⁴²『源氏』の庚申の夜の批判的な扱いに通じる（『枕草子』【九五】とは対照的）。また、『落窪』（一・三五～三六）に「心おとりもぞせさせたまふ。物忌の姫君のやうならば」とあるように、当時「物忌の姫君」という物語があり、それが醜女の物語として知られていたらしい（『新全集』頭注）。これらからすると、狭義の物忌を含め、几帳面に物忌みをする態度は、当時の貴族女性達にとってあまり好ましいものとして受け止められていなかったようである。方違の例だが、『平中』で男が女を置いて行く時に「命惜しきことも、ただ行先のためなり」と言っている（二五段・四九五）のと、後掲②も含め対照的である。

もう一例は、物忌札を指す「物忌」である。物忌札には、門・庭中などに立てる物忌簡、簾など屋内の境界に付け

る物忌札、身体に付ける物忌札の三種類がある。⁽⁴³⁾ 物忌札について、『河海抄』『貞丈雜記』に拠り忍草を用いるとする注があるが、これは平安末期の一時期に行われていたもので、遡らせたり一般化したりすることはできない。『禁秘抄』下にあるように柳もしくは紙製と考えられる。⁽⁴⁴⁾

【三〇】説経の講師は顔よき。（中略）藏人など、昔は御前などいふわざもせず、その年ばかりは、内わたりにも見えざりける。今はさしもあらざめり。（中略）烏帽子に物忌付けたるは、さるべき日なれど、功德のかたには障らずと見えん、とにや。その事する聖と物語し、車立つることなどをさへぞ見入れ、事についたる気色なる。【三六】節は、五月にしく月はなし。（中略）御節供参り、若き人々、菖蒲の腰ざし、物忌付けなどして、（後略）【八八】内は、五節のころこそ、すずろに、ただなべて見ゆる人もをかしうおぼゆれ。主殿司などの、色々の裂を、物忌のやうにて、釵子に付けたるなども、めづらしう見ゆ。（後略）

これらのうち、【三六】【八八】は神事（右の他に賀茂祭・田楽・石清水臨時祭等）における斎戒の為の物忌札であり、陰陽道に関わるものではない。両段は『堤中納言』「童の、相、袴清げにて、さまざまの物忌ども付け、化粧して」（ほどの懸想・四二三）に引用されている。『源氏』（浮舟(6)一二九）や次の②は簾や柱に付ける動かない物忌札であるが、【三〇】は身体に付けた札であり、本人は動き回っている。およそ籠居とは無縁である。

②①かくのみ憂くおぼゆる身なれば、この命をゆめばかり惜しからずおぼゆる、この物忌どもは柱におしつけてなど見ゆるこそ、ことしも惜しからん身のやうなりけれ。〔蜻蛉〕下・二九七・天禄三年三月二十日）

四、まとめ

ここまで見てきたことをまとめておくと、まず第一に『枕草子』には陰陽道に関する事柄が少ないことが特徴とし

て挙げられる。仏教関係の記事の多さ、多様さとは対照的である。先行作品を見ると、『蜻蛉』は物忌・方違の例がほとんどだが、絶対数が多い。『宇津保』は種類・内容共に豊富である。なお、管見では『竹取物語』『土佐日記』に見えず、『伊勢』『大和』『平中』『落窪』、また『枕草子』以後の『紫式部』『更級』『堤中納言』は、本稿で言及したもの以外にほとんど見当たらない。『栄花』は、『枕草子』と重なる時代・人物を描く部分を含めて、陰陽道に関する記述が多く、『源氏』以上である。描写が具体的な点は『宇津保』に似ており、陰陽道の禁忌（吉日を含む）や陰陽師重視の態度は『寝覚』と同様である。但し、殿上の花見以下の続篇は難波の祓や凶夢程度で、『枕草子』との共通性が伺える。

次に、絶対数が少ないことに関わるが、『枕草子』には、官人の陰陽師は固有名詞が見えないだけでなく、ほとんど描かれていなかった。もちろん『源氏』がこだわった律令官名の「暦博士」も見えない。

その理由を考えてみると、実際、定子の行啓日時等を勘申する場に立ち会うことは無かったかもしれないが（道長ら男性の言動を描く『栄花』とは見える範囲が異なる）、定子の出産や物怪、病気については、⑧などのように身近で占いや祓などを行うの見たであろう。しかし、『枕草子』は定子の出産（産死したことから慶事とはいえない）や病気、物怪など、陰陽師の活躍の場である定子の危機そのものを一切記していない。よって、出番がなかったのである。また実際、道隆が兼家や道長・頼通ほどには禁忌を重視し陰陽師を重用・信頼していなかったのかもしれない。更に、実際、祓など限られた場面では個人的にも陰陽師に身近に接することがあるが、全く記されていない医師ほどではないにしても、験者や法師の身近さとは比べ物にならなかったのではないか。それが記事の多寡にも反映されているのではないか。いまだ次のように験者並みに撰閲家や上流貴族以外でも呼ぶようになっていなかったようである。

②②「これをば思ひ疎みたまひぬべきことをのみ、かしこにはしはべるなるに、おはしたれば、御顔のかくなりた

る」とて、陰陽師呼び騒ぐほどに、涙の落ちかかりたところの、例の肌になりたるを見て、乳母、紙おしもみて拭へば、例の肌になりたり。

（『堤中納言』はいずみ・四九八）

但し、『枕草子』には、陰陽師に従う小童部や、法師陰陽師、更には式神も含め、陰陽師の周辺にいるものは一例ずつだが確実に取り上げられていた。これらは『今昔』や『宇治拾遺』などの説話集には散見するが、『宇津保』を含め仮名にはあまり見られない。確かに当時の言葉・風俗としてあっても、何かの理由で文学作品に取り上げられないものが、『枕草子』によって垣間見える例の一つである（例えば「すばる（昴）」という和名も他は『和名抄』のみ）。また、『呪詛』の明記も珍しい。これも一例だけだが、史実を考慮すると、記したことに重みがある。

物忌・方違その他については、『枕草子』では風俗としてそのまま受け入れる様子が見える。口実として利用することもない。しかし、呪詛は祓、凶会日は知られない点を取り上げ、物忌札を付けて外出する人を描き、物忌中は退屈だと言ひ、物忌を悪口に使うなど、禁忌意識は薄い。数少ない禁忌も、遵守の方向で取り上げられてはいなかった。そして、これらの記事が連続して出てくるのも特徴の一つである。一連のものと理解していたことを示し、陰陽道も執筆時（あるいは編纂時）の連想の糸の一つであった。

誰のものがわかる物忌は、村上天皇一例、一条天皇四例、伊周一例、繁子一例、清少納言一例（随想・類聚は除く）で、実際多かったはずの定子の物忌は一例も無い。不幸を描かないので禁忌にも当然言及しないわけであるが（朝所への方違のみ）、伊周や清少納言の物忌は定子との心のつながりを示すものとなっていた。『蜻蛉』や『和泉』と愛情の種類は異なるが、表現方法は同じだといえる。

おわりに

『枕草子』の陰陽道関係の記述を概観することを目的とした為に、各章段（特に日記的章段）の読みが不十分になってしまった。また、各用例も『枕草子』以外にも含め、見落としが多いことと思う。内容と共にご教示いただけたら幸いである。

陰陽五行思想を指標にすべてを含めるのではなく、陰陽道を限定して考えたほうが、陰陽道と各作品との関係を捉えやすいということを冒頭で述べた。『枕草子』は、その範囲内の事柄はあまり記されていないかった。むしろ『枕草子』の場合は、陰陽の調和や、四季、歳時、年中行事（特に五節供）などの記述が多く、本来の陰陽五行思想との関係に注目すべき作品であるように思われる。先学の成果に⁽⁴⁶⁾学びつつ、今後の課題としたい。

〔注〕

（1）例えば、川口久雄氏「平安文学と陰陽師・医師——今昔物語集を中心として——」（『国文学解釈と鑑賞』9—6、一九四一年九月）があり、『宇津保』『栄花』の例も取り上げ、医道が陰陽道よりも重んぜられていなかったこと、陰陽道は仏道の優位に立つことができないことなどを指摘されている。但し、「当時名医」と言われ、「医術」に長け、「医道」を代表する人物もいた（『権記』長徳四年八月二十七日条）。

（2）重松信弘氏「源氏物語の思想」（『風間書房、一九七一年』、村山修一氏「源氏物語と陰陽道・宿曜道」（『源氏物語講座 第五巻』有精堂、一九七一年）、藤本勝義氏「源氏物語の想像力——史実と虚構——」（『笠間書院、一九九四年』、加納重文氏「平安時代の『物忌』について」（『古代文化』23—12、一九七一年二月）、同氏「方忌考」（『秋田大学教育学部研究紀要』23、一九七三年二月）、同氏「方違考」（『中古文学』24、一九七九年九月）、李一淑氏「蜻蛉日記」の物忌記事の一考察——付・平安中期の物忌の諸相」（『国文』79、一九九三年七月）、同氏「四十五日忌に関する一考察——『蜻蛉日記』の記事をめぐって——」（『人間文化研究年報』17、一九九四年三月）。李氏が指摘された「蜻蛉」「和泉」の注釈の誤りの箇所を、注釈書類では取り入れられるべきだろう。

（3）拙稿「源氏物語の道教・陰陽道・宿曜道」（『源氏物語研究集成 第六巻 源氏物語の思想』、風間書房、二〇〇一年六月）。

(4) 山下克明氏「陰陽道と文芸」（『国文学解釈と鑑賞』57—12、一九九二年二月）。より詳しくは、同氏の『平安時代の宗教文化と陰陽道』（岩田書店、一九九六年）を参照されたい。また、注（3）拙稿に本書の關係箇所を要約を載せさせていただいた。『国文学解釈と鑑賞』20—7（一九五五年七月）の堀内秀晃氏「思想的背景としての陰陽道」も、陰陽道を中国伝来のものとして定義は広いが、要点が示され有益である。

(5) 陰陽師賀茂家栄（一〇六六—一一三六）撰『陰陽雜書』や、安倍泰忠が元暦元年（一一八四）九月に書写した『陰陽略書』を参照すべきだろう。専門家の著作であり、時代的にも近い。前者には例も示され（第八、著座吉日は師輔・兼家・道長・頼通・師実）、撰関以外では実資の例もあるが、凶の例も含め道隆・伊周は見えない。なお①の「蜻蛉」の養女迎えの日の天禄三年二月十九日庚辰は、両書共に移徙吉日とし、「白虎臨日」の吉日でもある。増山恵美子氏「拾芥抄」に見える嫁娶吉日の類証」（『豐麦』8、一九九八年九月）は、天禄三年から保元三年の実例を検証し、伊藤博氏「和泉式部日記」（十二月十八日）考」（『大妻国文』31、二〇〇〇年三月）は、宮邸入りの日が行・嫁娶・移徙等に忌むべき道虚日（どうこにち）であったことや、「土佐」「蜻蛉」「紫式部」「更級」「讀岐典侍」「十六夜日記」に見られる出行等では明記されていないが吉日が選ばれていたことを指摘し、藤本勝義氏「紫式部の越前下向・再論——長徳二年六月五日出発——」（伊井春樹氏他編『源氏物語と古代世界』一九九七年、新典社）は、「小右記」「権記」の国司下向の日がほぼすべて出行吉日に当たることを明らかにしている。

(6) 本文は、『枕草子』は「和泉古典叢書」（章段番号も、能因本は小学館『日本古典文学全集』）、『宇津保』はおうふう「うつほ物語 全」、和歌は「新編国歌大観」に、その他はすべて小学館『新編日本古典文学全集』に拠り、頁数を示した。括弧数字は巻数である。また、「口遊」は勉誠社「口遊注解」、「権記」は「史料叢集」、「小右記」「御堂関白記」は『大日本古記録』、その他の史料は「新訂増補国史大系」、各陰陽書は中村璋八氏「日本陰陽道書の研究」（汲古書院、一九八五年）に拠った。傍線はすべて筆者に拠る。

(7) 頭注に「このようによい日だといって出かけたのに、以下のような不運にあうところにも作者の皮肉が見える。」とある。③の「栄花」も、このあとに親王（母は芳子）の暗愚が露呈する場面があり、同様である。

(8) 注（5）に挙げた陰陽書には、まとまった記述が見られない。『暦林問答集』釈凶会第四十四に「無大歳之二字者、陰陽書云、皆云凶会、或二字、或四字」とあり、中国の『新撰陰陽書』が出典であることがわかる。

(9) 桃裕行氏「桃裕行著作集 7 曆法の研究（上）」（思文閣出版、一九九〇年）二二—二四頁。

(10) 藤本勝義氏「紫式部の見た暦——長徳二年具注暦をめぐって——」（『青山学院女子短期大学紀要』50、一九九六年二月）。

毎年七十九日すべてあるわけではなく、その干支が全くない月（暦月）もあり、長徳二年は一年間に三十八日であったという。

(11) 藤本勝義氏「藤原道長と陰陽道信仰——帰忌日をめぐって——」（『中古文学論攷』19、一九九八年二月）は、「不可遠行・帰家」の「帰忌日（きこにち）」に道長がいかにこだわっていたかを、「御堂関白記」の記事によって明らかにされている。また、道長が天皇の衰日を氣にする様子が、「権記」長徳三年十二月十三日条や長保二年八月三日条に見える。一方道隆は、同衰日に上表している（『解環』が『關太暦』貞和六年三月十八日条所引の長徳元年二月二十六日の例を指摘）。

(12) 『解環』の説に従い、長保二年正月四日のことと考える。拙稿「枕草子日記的章段における表現の二方法——「がうな」の段の「笑ひ」を中心に——」（『国文論叢』15、一九八八年三月）。

(13) 注（2）の加納氏の方忌・方違に関する論文。平安中期に実生活に浸透しているのは、「大將軍」「天一神」「太白神」、特に後二者であるという。また加納氏には、「藤原道長の禁忌生活」（村井康彦氏編『公家と武家 その比較文明史的考察 I 公家と武家の諸相』思文閣出版、一九九五年）がある。

(14) 増田繁夫氏「節分・節分方違」（『日本古典評釈・全注釈叢書 月報30 枕冊子全注釈 四』一九八三年三月）。

(15) 古川麒一郎氏他編『日本暦日総覧 具注暦篇 古代後期 1』（本の友社、一九九二年）に拠る。

(16) 但し、注（5）に挙げた陰陽書が両書共に移徙の各月の忌日として「二月午」を挙げている。これに従うと当初予定されていた十一日も不吉の日となる。

(17) 記録や「枕草子」に見られる定子の行啓（移徙と見るべきか）の日のうち、吉日でないものは、他に正暦五年二月十三日乙未の土御門第へ（前日の甲午は吉日）、長徳元年七月七日辛亥の内裏へ（前日庚戌は吉）、「一五六」は八日の壬子とする、長保元年正月三日丁巳の職御曹司から内裏へ（前日丙辰は吉）、同二年八月八日壬子の内裏へ（壬子は出行の大忌）の移御に限られ、他の十四例は吉日に該当する。但し、行啓に限らず、定子に関わることで日次を勘える行為を記したものは、生前には見当らない。

(18) 大祓について、文武百官の男女が参加する朱雀門前での大祓のみを示している注が多いが、定子退出に関わるのは、その前に行われる内裏での天皇の為の祓行事のほうである。中臣が大祓（おおぬさ）を奉って祓をし、東西の文部が祓刀を奉って祓い、道教系の祓詞を漢音で読む。官人の祓のほうは、中臣が祓詞（大祓詞）を宣下し、占部が大祓で祓をした。平安中期から、個人の邸宅や河頭で行われるようになり和歌に詠まれることが多い「六月祓」は、陰陽師による。大祓詞を改めた中臣祓（中臣祭文）を、他の祓と同様に用いる。岡田莊司氏「祓（はらい）の系譜」（『佛教文化』34、一九九五年二月）等参照。

「祭文」は「二八五」に見える。

(19) 拙稿「忘れ草攷」（藤岡忠美氏編『古今和歌集連環』、一九八九年、和泉書院）及び「漢風暗黒時代」の中で「〔叢書想像する平安文学 第1巻 〈平安文学〉というイデオロギー〉一九九九年、勉誠出版）でもふれた。

(20) 拙稿「平安時代の吉方詣考」（『古代文化』44—5、一九九三年三月）、同「八卦法管見」（『文化学年報』12、一九九三年三月）、同「院政期の出産・通過儀礼と八卦」（『風俗』32—2、一九九三年一〇月）参照。

(21) 「土佐日記」承平四年十二月二十九日条に、土佐国の医師と屠蘇・白散のことが見える。北山円正氏「土佐日記」の正月行事——「屠蘇・白散」をめぐる——（『神女大國文』5、一九九四年三月）参照。

(22) 注（1）の川口氏の論文参照。仮名散文では他に「落窪」の典薬助の描写が知られる。

(23) 注（2）の藤本氏著書の二八七—二八八頁。道長の陰陽師に対する信頼を含めた陰陽道信仰については、村山修一氏「道長の陰陽道信仰」（『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年）や、山中裕氏「平安貴族と陰陽道——とくに藤原道長を中心として——」（『神道大系 月報67 陰陽道』一九八七年七月）及び注（13）の加納氏の論文で概観できる。

(24) 藤本孝一氏「藤原伊周呪詛事件について——宿曜師利原を中心に——」（『風俗』19—1、一九八〇年六月）では、宿曜師利原が伊周の為に道長の運命を占い、その結果に基づき伊周は法琳寺の僧に太元帥法を行わせて呪詛させたと考えられている。

(25) 「五」の門、「六」の鳥流し、「二九八」の火事等々。注（12）の拙稿を参照されたい。

(26) 祓などの陰陽道の呪術祭祀に用いられる「撫物」は、個人の身近なもので、「人形」とは異なり返される。衣や鏡が代表的であるが、一三〇〇年頃には櫛も用いられていた（主に着帯に関わる）。これとの関係は未詳である。田畑衣理氏「中世の祭祀における「人形」の用法と分類」（『歴史民俗資料科学研究』6、二〇〇一年三月）参照。「祓の具」について詳しい。

(27) 増田繁夫氏校注「私家集注釈叢刊7 能宣集注釈」（貴重本刊行会、一九九五年）の注に詳しい。「法師陰陽師」や「尾張法師」（「宇津保」国譲・下にも）は、「卯杖ほがひ」を述べる「七五」「二五二」の「卯杖の法師」や、後世の「千秋万歳」等と関係があるのだろうか（いずれも僧形で現世利益の呪術祈祷師）。また林淳氏は「陰陽道と仏教」（日本の仏教 第Ⅱ期・第1巻 仏教と出会った日本）法蔵館、一九九八年）で、下級僧侶である法師陰陽師のことを、「社会的に認知」される「陰陽師」と呼ばれている。なお、注（3）の拙稿で、「陰陽道僧都慶増」（『江談抄』三一四〇）に1の(5)「民間の陰陽師」の中で言及したのは不適切であった。彼は活動内容が陰陽師と重なる宿曜師であり（『二中歴』十三）、台密の高僧である。

(28) 具体的な占いの方法については、小坂眞二氏が「六壬式占の所主推断法・指期法・指年法」（『古代文化』38—7—9、一九

八六年、「物忌と陰陽道の六壬式占」(『後期摂関時代史の研究』一九九〇年)、「式占」(『別冊太陽 占いとまじない』一九九一年五月)に示されている。また、同氏は「自筆本『御堂関白記』の物忌注記について」(『東洋研究』一二七、一九九八年一月)で、当時は、「病事の年当」つまり、怪異が病気の予兆であって、それになる恐れがあり予防の為に籠居しなければならぬ年回り(十二支で示される)に当たっている場合が、「最も重い慎みと意識されていた」ことを明らかにされている(『寢覚』巻一や『大鏡』巻五の例がある)。式占を含む多様な占いについては、加納重文氏「平安時代の卜占」(『京都女子学園仏教文化研究所研究紀要』14、一九八四年三月)を参照されたい。

(29) 繁田信一氏「平安中期貴族社会における陰陽師——とくに病気をめぐる活動について——」(『印度学宗教学会編『論集』18、一九九一年二月)。祓・祭・反問による「治療・予防」の役割についても詳しい。用例⑪⑬⑮参照。但し、「もののけ」や「祟」の語を病氣の原因となるすべてのモノに対して用いている点はいかがか。

(30) 注(4)の山下氏著書の四一〜四五頁、二瓶陽子氏「安倍晴明譚に関する一考察」(『日本文学ノート』34、一九九九年一月)。二瓶氏は、晴明伝説成立の要因として、式神との結びつきを重視される。注(37)の鈴木氏の論と併せて参照されたい。

(31) 『枕草子』には今昔の対比表現がいくつも見られるが、今をよしとするのは「二〇」末尾の一例のみである。昔を羨むようにいて現状への満足感が語られている。拙稿「枕草子における今昔の対比表現に関する一考察」(『国文学研究ノート』20、一九八七年六月)。

(32) 注(2)の加納氏の物忌の論文。頁数は『古典大系』に拠っている。

(33) 廣田いずみ氏「平安貴族社会における物忌について」(『お茶の水史学』39、一九九六年一月)。

(34) 注(32)に同じ。『権記』長徳四年三月四日条は、天皇の物忌の為に候宿する予定だったが、急用があり一旦内裏を出て、「丑四刻」になってしまったので、「不能参上」になった例である。

(35) 足助朋子氏「紫式部日記」の賀茂臨時祭と御物忌」(『国文鶴見』31、一九九六年二月)に、天皇物忌中の賀茂臨時祭の例が豊富に挙げられている。

(36) 例えば、『小右記』正暦元年十月五日条のように、予想される災厄が「口舌」の場合は軽い物忌であり、外出してもよかった。覆推(再度占うこと)の結果、兄弟の両日あるいはどちらか一日の軽重が、当初の占いと逆になる場合も、程度が異なる場合も、変わらない場合もあった。注(28)の小坂氏論文、注(33)の廣田氏論文、鈴木一馨氏「物忌の軽重について」(渡辺直彦氏編『古代史論叢』続群書類従完成会、一九九四年)等参照。なお、他所での物忌については、『御堂関白記』長和二年四月三

日条を見ると、重い場合ばかりとは言いい切れない。

(37) 鈴木一馨氏「式神の起源について」（『宗教学論集』20、一九九八年四月）。同氏は、『小記目録』第二十・御惱事・臣下の箇所「同年同月（長保二年五月）八日、左府所惱式神所致云々事」とあり、『編年小記目録』には更に式神によって道長が病氣になった翌日、家から厭物が出たことが挙げられ（『小右記』本文は欠）、『権記』同十一日条には、道長が天皇に病氣の原因を「厭物・呪詛」によると奏上したという記述があることも、指摘されている。注（29）の繁田氏の論文でも式神に言及されている。これらに拠ると、「式神」は「呪詛」と共に、『枕草子』においては禁句であったと言える。

(38) 三木雅博氏は「口遊」所引の中国の占雨誦句と大江匡衡の賀雨詩序の「東方朔之前言」——『平安貴族の生活と中国文化』素描・その一——（『梅花女子大学文学部紀要』34、二〇〇〇年二月）で、「中国から伝わったこれら（『日本国見在書目録』五行家に見える『東方朔書』等、中島注）の占書の類は、現代の私たちが想像する以上に、都の貴族社会においても、あるいは地方の国衙においても、広く浸透し、また医学書や本草書（『宇津保』蔵開・上の「くすしぶみ」である、中島注）など同様に、人間生活を営む上で、重い意味を持つて用いられていたのではないかと思われる」と述べられている。

(39) 記主の立場に拠るが、当時の日記にも道隆の物忌はあまり記されていない。「小右記」正暦四年三月十四日条の「御物忌」は道隆のそれである。また、道隆が蔵人少将時代に天皇の物忌に籠る為に帰ったことが、『赤染衛門集』三の詞書に見える。なお、同じ人物関係において詠まれた歌が次の「やすらはで」である。

(40) 当段の定子と清少納言のやりとりは知識のテストではなく、日常的なさりげない会話である。雪を見たいとの意向なので、言葉で応じることはありえず、動作で示すことのみが求められたことであった。拙稿「枕草子「香炉峯の雪」の段の解釈をめぐって——白詩受容の一端——」（『国文学研究ノート』25、一九九二年三月）。なお、『七八』との関わりを考えると、定子御在所を廬山に見立てた可能性はより高まる。

(41) 注（2）の藤本氏著書の二六〇頁。

(42) 注（2）の藤本氏著書の二六九頁。同じく注（2）の加納氏の物忌の論文中でも、「本当の意味で生きるということを願望し苦悩することを余儀なくさせ」られた「蜻蛉」「紫式部」の作者達が、「単純に生命の保全行為と言つてよい物忌に対して、皮肉な嘆息をもらしているのは、当然のことであった」と言われている。

(43) 小坂眞二氏「物忌・方違と陰陽道の勘申部門」（『陰陽道叢書』1 古代）名著出版、一九九一年。

(44) 拙稿「忍ぶ草の物忌札——『中外抄』『富家語』を中心に——」（『語学文学』34、一九九六年三月）。

(45) 一条天皇の物忌は、『枕草子大事典』（勉誠出版、二〇〇一年）の「枕草子総合年表」に記されている。「今・明御物忌」は今日・明日のことなので、もう少し増える。以下、管見に入ったものを挙げておく。正暦四年五17内御物忌（小右記16）、同六25御物忌（小24）、長徳三年七28・29御物忌（権記27）、同八19（6はまちがい）御物忌（権）、同九9丑二刻還御（権、小ではない）、長徳四年二23御物忌（権）、同三4御物忌（権3）、同三20道長（天皇ではない）の物忌（権）、長保元年七9御物忌（権8）、長保二年二3御物忌（権2）、同二12御物忌（権）、同六13・14御物忌（権13）。

(46) 日向一雅氏「枕草子の聖代観の方法——「陰陽の變理」の觀念を媒介にして——」（『国語と国文学』70—9、一九九三年九月）、高橋亨氏「歳時と類聚——平安朝かな文芸の詩学にむけて——」（『国語と国文学』76—10、一九九九年一〇月）等。